

気が付けば、スウェーデンハウスを建ててはや3年。
オーナーコピーライターのひまわり。

ウエーデンの我が家

「+60センチの幸福」

「クッキーを焼きます」と宣言して、設計段階でキッチンを60センチ広くしてもらった。キッチン色に焼きあがるクッキーを娘と並んで眺めるんだから、誰が何と言ったって眺めるんだから、その分ダイニングが狭くなるうが知ったことではない。

何故だろう、住む前から「スウェーデンハウスは、クッキー作りが似合う家である」と勝手に信じ込んでいた。「長靴下のピッジ」や「やかまし村の子どもたち」がクリスマスに焼いていたジンジャークッキーのせいだろうか。娘と作るなら、まずはクッキーでしょ！と夢見ていたから

だろうか。ともあれ、+60センチを死守した私は、宣言どおり、ことあるごとにクッキーを焼いている。

ブタやクモ、手、足、歯……しまいにはエッフェル塔やアンコールワット、恐竜シリーズ(全6種!)の抜き型まで手に入れて、机や床の顔を粉だらけにして楽しむ親子の時間——priceless——ついでにうヤツだ。そして更なるお楽しみは、家中に広がるクッキーの匂い。「いやあ、24時間換気システムってやっぱり動いてるんですねえ」と、家の性能も再確認。甘い香りに包まれて、気持ちもほっこり、うっとり。うーん、し

あわせだなあ、我が家は。

ただ一つ、困ったことがある。うちの3歳児は「煎餅派」。甘いクッキーはお気に召さないらしい。いつだって焼き上がりを一つ食べただけで「おせんべは？」と聞いてくる。「母さん、次はおせんべ焼いてちょうだいな——煎餅ですか。煎餅ね。うーん、焼いたことないし。家中が醤油臭なわけですし——私にはっこと笑って答える。「今度、買ってきとくね」。



ウツブの我が家

気が付けば、スウェーデンハウスを建ててはや3年。
オーナーコピーライターのひかりこと。

「うちの園芸課長」

一戸建ての楽しみの一つに「庭」がある。どんなに工夫をしてみても、マンションのベランダに「大地」はない。引越しをしたら木を植えよう。どっかりと地面に根を張り、天に向かって伸びる木を。

我が家には「園芸課長」と呼ばれる人がいる。私の夫だ。見かけによらず花や草木が好きなので、外仕事の時にはそう呼んでいる。この課長、マンション時代には鉢物を枯らす天才だった。マンションのベランダ植栽は窓を開けないと姿が見えない、見えないと忘れる、忘れると枯れる。まあ、仕方がないよ

うな気もするが、それにしたって、部屋の中の「幸福の木」さえも瀕死の状況に追い込んでいるから、かなりの業師だ。そして「うちは、娘以外育たない」と言い切った彼は、それきりベランダ園芸に終止符を打った。

数年後、念願のマイホームを建てた私たちは、小さいながらも庭を手に入れ、夫はふたたび園芸課長に変身した。なんてたってスウェーデンハウスですから。花や緑を楽しむには最高！と言われるスウェーデンハウスですから。これが張り切りすぎにいられますか。

ベニガラ色の外壁に映えるよう、ミモザを植えよう。棗とジューンベリーは収穫が楽しみ。パーゴラにはスイカズラとジャスミンを。夏が近づく夜、僅かに開けた窓の隙間から甘い香りが漂ってくるだろう…園芸課長は次々と植栽計画を実行し、育て

方を調べて台帳に記入。以前のトンチンカンを卒業し、かいたいしく世話を始めた。長靴姿の彼の後ろに、スコップとジョーロを持った娘が続く。うーん、しあわせだなあ、我が家は。

引越してから3年経った今、小さな庭は緑で溢れ、ウッドデッキには寄せ植えの鉢が並ぶ。窓を閉め切っても、この家ならばその美しさは手に取るようだ。毎朝起きるとまず庭を眺めてニヤニヤしている我が家の園芸課長。この夏、園芸部長に昇進予定だ。



ウフの我が家

気が付けば、スウェーデンハウスを建ててはや3年。
オーナーコピーライターのひかりん。

「グッバイ・マイ・床暖房」

ロフト、吹き抜け、掘り炬燵、勝手口、小上がり、斜天井、琉球畳、サンルーム、地下室、そして床暖房。家を建てると決めてから、さまざま希望と妄想が頭の中を駆け巡った。その中でもかなり優先順位が高かったのが床暖房だ。何を隠そう、私は冷え性だ。自己紹介の欄に「冷え性」と書いてしまうくらい冷え性だ。そんな私にとって足元からじんわり身体を温めてくれるというその設備は、絶対必要不可欠、しあわせの象徴のような存在だった。

ところが、スウェーデンハウスの美人設計士は一蹴した。「いらなと思います」——何故だ!? 二戸建ては寒いはずだろう!?——なんでもスウェーデンハウスの断熱性はすごくて(断熱材がすごいのだ)、気密性も高くって(隙間が少ないのだ)、冬でも裸足でいられるくらい暖かいらしい。「本当か?」半信半疑で説明を聞き、一応納得した私と夫——床暖房はつけないことになった(でも本当言うと「寒かったら後でつけてやる」、と心に誓っていた)。

そして最初の冬がやってきた。まず後悔したことは、秋口に買い込んだ娘のルームソックスや靴下。コイツは本当に無駄だった(折角だからと履かせてみたら、フローリングでツルリと滑った)。新築祝いにスリッパをくれた友達にも悪いことをした。一生出番がないかもしれない。——そう、この家の暖かさは想像以上だった。あれほど床暖房にこだわっていた私は「負けたのか」「勝ったのか」：まあ、そんなことはどうでもいい。床暖房は、もういらぬ。小さなひも付きミトンを手にはめて、娘が庭に飛び出して行く。結露しない窓からは、出来上がっていくおかしげな雪ウサギがよく見える。「寒い寒い」と帰ってきたら、一緒にココアを飲もうかな。キッチンでミルクを沸かす私の足にも、もはや靴下は見当たらない。うーん、しあわせだなあ、我が家は。冬は「家族」が嬉しい季節、そして「家」が嬉しい季節。今年の冬は、うんと寒くなるという。



ウエーデンの家

気が付けば、スウェーデンハウスを建ててはや3年。
オーナーコピーライターのひとりこと。

先日、娘に「今年はサンタさんに何をお願いするの?」と聞いたら、「え!?また来るの?」という言葉が返ってきて、ずっこけた。クリスマスはね、毎年来るんだよ——4歳の娘には、まだ記憶に残るクリスマスが1回しかないのだ。だからサンタクロースだって、去年1回きり、単発でやって来たという認識を持っていたとしても無理はない。思いがけぬ吉報に喜んだ彼女は、「じゃあ、お手紙を書かなきゃねえ」と、クレヨンを取りに走っていった。

スウェーデンハウスで暮らし始めて、クリスマスは特に楽しい季

「100年後のクリスマス」



節になった。リースやツリー、キャンドルがよく似合うから、という理由ももちろんあるが、もっともあたたかな「家族の記憶」のようなものが、この特別な季節、この家のそこに、ひととき深く刻まれていくような気がするからだ。昔読んだスウェーデンの物語の中に「お母さんが子どもだった頃から、ずっと飾っている天使」を、女の子がもみの木に飾るシーンがあった。家族つて続いていくものなんだね、受け継いでいくって素敵だねと、えも言われぬあたたかさで一杯になって、「ずっと」

という言葉に憧れた。ずっと住み継げる家っていいな。20年後、50年後、娘の子どもたちが、そのまた子どもたちが、この家で同じようにクリスマスを待ち望む日が来るかもしれない。100年後、「おじいちゃんのおじいちゃんが建てた家」とか言いながら、たくさんの子どもたちがここに集まることだって、あるかもしれない。この家は、きつと変わらないぬくもりで、その子たちに素敵なクリスマスを過ごさせてくれるに違いない。ずっとずっと……100年先を夢に見ながら、真つ赤なキャンドルを窓辺に飾る。うーん、しあわせだなあ、我が家は。今年もクリスマスがやって来る。娘にとつては記憶に残る2回目のクリスマスになるはずだ。願わくば、記憶の一番あたたかな場所に、家族の笑顔とともにこの風景が刻まれますように——
メリー・クリスマス!